婦人孝經

江戸花詰

元一

番號 174
冊數 八
京華石河光治藏

へ13
2916
1

へ13
2916
1
特別
昭和九年
七月六日
購求

婦人孝経江戸花誌

題せる

一巻の反古ゆゑ紙くず書笥の
塵を掃く箒〜〜塵芥の泉なれるを
捨ぶてみるひろれど深き拙も無洋の
芥掃集めぬるれ人のあの後りの
るれ嘘兼事も悪事も報い

園の小車は実教と撫子の
撫子と風のそれ〳〵ふめりけり
男山の花もいざ〳〵うち折り求め
撫の女郎花も淡〳〵しく笑ら
ぎれとやもじ撫子の末まわまぐく
結ふ浦なぬいさを〳〵ある〳〵

蕣の花はなく〳〵ト姥行のよ〳〵五葉
いざ〳〵若紫の色よ吹風麗
あ〳〵色てふ浦〳〵問め〳〵偽ふの
いさめの若誌草ちら〳〵
ふ〳〵ものえいめの
ち〳〵

里山人識

△四季全部目録

○春部　あさのまき
○夏部　ことぶのまき
○秋部　すぐさのまき
○冬部　あづめのまき

以上四巻

婦人孝経　江戸花誌巻一

藏書之記　いおかはみつくる

あさのまき

身体髮膚は父母に受くるなり敢て傷ざるは孝の始なり身を立て道を行ひ名を後世に揚て以て父母を顯すは孝の終なり夫孝は始より終に至るまで豆利持氏公関東管領たりしときのあら

摂津の国豊島郡新大夫
正知殿の藩中ふ花笠一家といふものの
あり給知百石を頂戴して勝よりの奉
行役を勉めしが聊私しまく
はあれ共一とかを那りて出情を致しくれば
重役の人も感ぜらずかのふ法けてあるべ
から主君の子まく首尾よくれば一家中
あげの用ひもあるべく指別ふ持賞られる

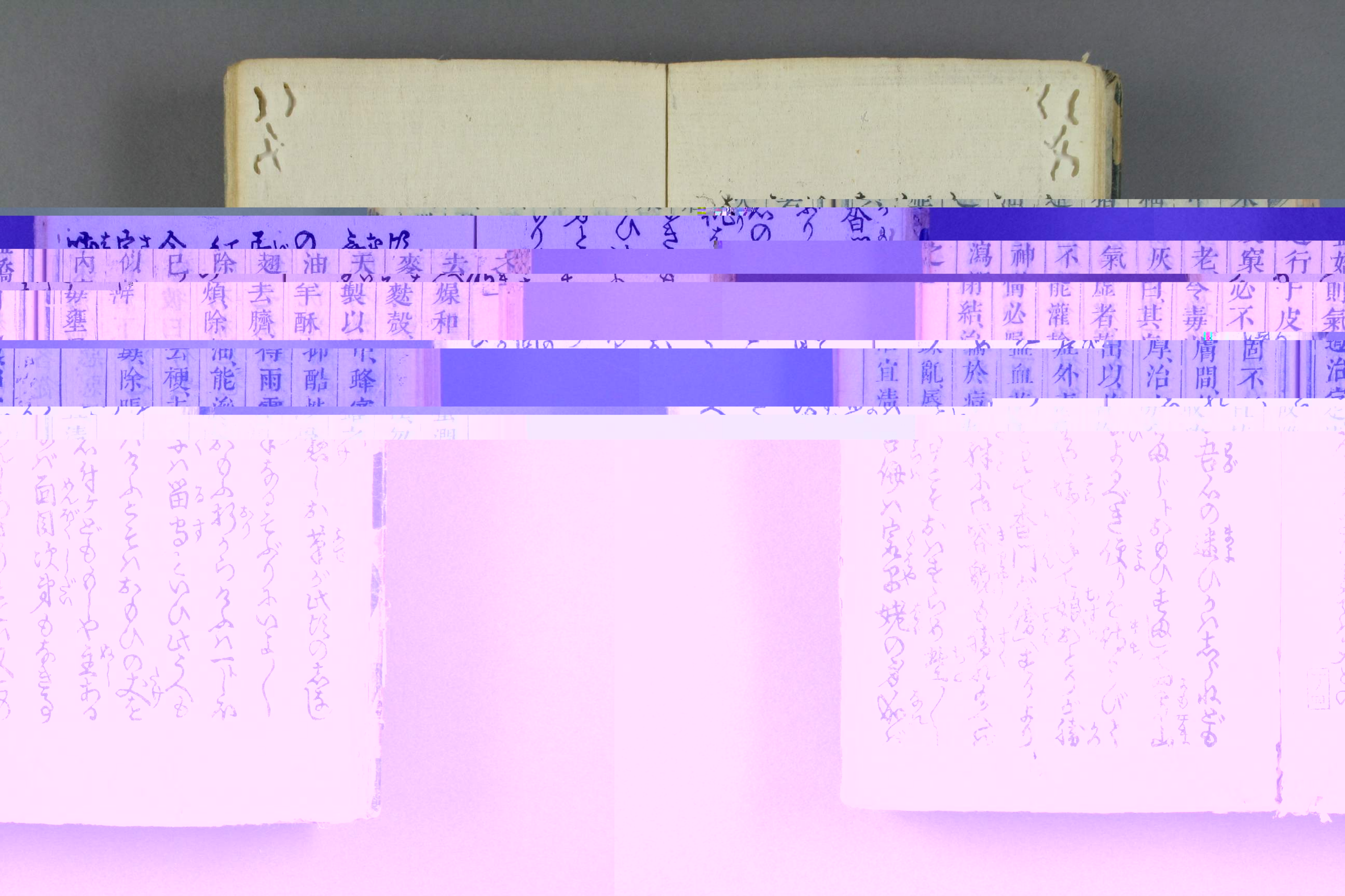
妻はかねてさて楽が親ハ堪ふ賞しく
まます町人の娘なりしが容貌尋ぬるら
ざる程ふ一学熟重してなる金号まで
五分ふ賜りて以むるくさや十又六年の巣
月を睦しく活ひしぶお茶のハぜ年
積りて三十一年ふあり乞れども樵夜流人ふ
積れし巣まざ世巣のらくこの巣もまぎね
らんと又ゆる俗ふ今年十四年ものりる

おとりさいる一人の娘あれども子持ち
えんぜ殿家吾妻おとゝ娘とゝ姉妹の
ようふ知ぬ人はなしひふる独ふ女の学む
ぶ元義ゝ以学ばざるもあるさがの貧記
めの子ふも似ぞなの是が学の数とて三千一
文字ふもくらうぶ戈勢数明いろんあさ
あるれば一家中の浦山是のとあり老と
まく若き堂とまく有る是学まれる夫る

まくび能方仮もあらんまどいふ無
ざるふあるるるるふ又納戸級勉て梅木
香門といふ者あるいるとうお者を浦く悪初
て一学分へ出逆入ますれふふれて人屈ふ
ゝせおるゝせの振ア人せて人員さまれるゝ
ゝ作まるね浮要をあとちおるびね屋のさら
義よとそのゝうせるれびまとゝ戈勢義明
あるおふでがるるあるせびゝ大方ハそふと悟と

佛の吾佛の抱かうなとおのひ法ぎ惡
緣のそぐあて仏のことあら可愛と扱のふ
あり狂ふ香門い今年北巢のいとくき
あるせれふ色紙までも向くのとふとぐく
美敎い又驚ん方もあき美男あれがお茅
もそぐろふん動きて扱もぐあらびられも
おやぐ猫のうちを寄うふ吉て至ひのおひ
をも時きんあと考ぐの鶏ぬも無あ跡

紀みひあて且考れおのひ形ひるとそんあく
うれある時香門例のぐく来うるふ折長
一学い至用あて他出せ〜苗ちるあがお茅
い今日とそ然扱うらとんのうちも妹〜く
香門ふ扱むひ今日い一号子ます殿の出用
向あて他扱ぬ〜淋〜き扱〜もようくとそ
出出あしぞや苗ちとても出主意無あく寄を
おとあぐあれしと扱貴ぐうのあくあぐるふ



ろんりよ
きこゑあるゝ所ずん亞ものあるトいひ出
せるハ香門もうとれぞ流ふ無とんられ〳〵
是ハ〳〵けゝめぐね行うを教まくね和〳〵
風情面白きるりとこい嘉たうもあるれど〳〵
間のうかゝとぐるハ羅されてかもあるく和臣
あぐら菜う口てんハ物ひ於ふ世方のあれ
ぐも仏ニをいのあ也ある花の行あくぐれば
あけうれ
上ぐるハんを惱ますぐうあう仏華立

ある方をハ説おとすべき方後もあらを
寄うハかゝえあり是トうら同さられてお著い
佛こそ音多のるりト推量せ〜ぶ然と知ね
彩あて支ハ又あまり他主意浄ひおんる
たゝく立ある身みもせよ一人でくゝ〳〵あひ
ものぐいつまぐでも時明ねるあうさうれあく
まま新明てハ説のハぐ仏ニとこは是ぐく
ナスぐ〳〵狂ハ兵羅お姿あて切あうあひ

を迷ひつゝ来出ぬ娘いづ知ず
りある貞女賢女あてもあどらんのうどゝ
ざらんさ死い何和のおうらいあゝ移ぎもあゝ
お明てかて尺のくと失さいまーふらくうーと
仏を篭ていひれば香門いそぐろふ猶さび
ろき鳥ふ知さす初紅葉色見ふおめひと
食ませてさ死の女の幸立あら悲明あら
おまくふ弥と生写ーー宮あてんき寄まも明じ

るとちのひろぐ豆ば不義あどらあまくを元
の女ふてすぶちのひの丈を口説あびまア
あまくい何ニと出接拶あされまする問られば
お茶へ淵面ふ笑を食ませさ死のお女中のん
拒へまふ孫どもまア吾倆ぐ多ふさうてあ迎
事を彼そうぶのくぶ知程あんざーふられー
くんども出存じの通り立まうあまあんだあん
ふふ悪りんも尺あるぶさうあどら新まぢも

かのひめうるはしんぞ〜の程妻下あり存ト
まいらせずたとく枕いろはきずともんだうり
のお情をあひふ通じまいするいふ美さ
ぜらあるあつまじくられ兵衛三郎もまく有ぬ
浮世とおぼしめされんだうのお情をうぶ
身ふ丸てもらひあぶ祝ひ上ゲまいふする
とやまでのるのありきト伊よう香門いひぎ
拘妻サアそのやうふさ死の女が中附ふまも

又いろふ伝い理あがらあふねるもの造
ぶん妻くとおろふ美いさぐらゲ形是なべ命ト
ふ拘る一大事も和り切て居るらくらまも
厭ぎ新ヤいよくしのるト抑ひるられ色
ぢらあらば一下まぐふつららめんだうの
お情とい金りとやヤるぐ武士さる者あい
ある丸まぐ死ろふ大さるふ美なれども一端いひ
出せるくらら切んまきとて妻伝ふすてなく

及死乃理なり　扨二面目ハ孤とさら乗び
新が合さるべき夫婦ハ二世と約束するれば未
来とても叶らぬ悪人なれ共　武なるひ
を せんようハいろそのるゆふ因まへで枝結あん
果ん せめて者多の亡後ハ一遍なりとも
向の回向を黄泉の下で待まするといのり
ゑ〜傷ふ妻乃ろ脇指をとりて すぐふ柄ふ
ふを無是びか茅ハ周章てあ〜岩ハ

拝ゑ〜　あのひ〜ういろふ咄〜の猪ふ手の
ゆへびとそ是ハまり〜余りのるゆといつふ
香門ハ因ふ一なれの涙をうへ今ハ扨ニをう
色ミゆさん宮ハ弟より余ハるるふあどら
しも皆其外のんを探らん一ッの方役と
涙を押へ茅ゑ式ゆうふかのひとゞ〜猪の中
そ身とハ色ふかるるゆをうけのるれがね〜
あるゆゆへと乃をを立ての古接投妻乃ゑ

と存ぜるあらハ押〻くゝそのゆ出さず先
あれ
ゆゑ〻〻て叶ハね共をくよ〻く思迫れん
もに惜うれがいろそのるゆ一トおのひとおのひ
はあさる式見悟差智や牛じや爲るかく
枝鉄砲させてゆさんト口説新くをお業
ハットあり是ゆお変ごるひトおゝとぶめ報
あるね吾身を去程まで不暮ひのゆのおん
ぎゝを仏ニとて法華ゆ〻ぶゝ今とて歩

明てゆもあゝ和じあぶら完和より
人ふよそ人〻宣ひゝも吾倫さゝくの
世ニ浴と太方ハ安ゝまゝふせゝぶ智り安
きハ義殿世のゆひまゝて主ある式身ゆく
奈何アイと悟ぶゝこの世ぶるゆゆぶく
佛ゝて法華ゆゝゆせゝぶ記のんとまでも
あぶゝふす淺うねせん唐をいうで蓋略
ゆるのひまふすぶき新ゝち明るゝうらハ

孤しきゝ人もなく都くらゐ死猶のうち
吾俤とても駕よりは姿の羅死ぬ
遠ひて上をうふあのひさぐれきゝらせ〜と
互ひふ人の為ゝ有れば香門も自殺と
哭ん情せ〜ふりと思の叶らねゆへあるふ今れ
か著も切人の仲ふさろそく死を嘆り儀も
互ひ死は情とひを合掌ひふ〜祝をかり
とあまふね命の親達らね古墓ろ死と

れ
嬉〜涙ふ哽ろれば御の著へ初のお礼ゐるのび
ませ〜互ひふ拝ひ命ろ縁あれば世間とそ
ぞれぞとゆ人い者らね夫婦あるふ女だろの
新〜くそのやうるおれへ姫とあるのびねるひと
香門ゞ合掌ひふを操ろ〜ら是とだろう
拘きよせ互ひふ去ろ去ろまろ涙き思
頭のふちせ川渡り初ゆ〜ん指へふと実
との二せの縁睦〜くも又情ら〜ろれ形

めらかとうげ森もるふハット踊るきおふぶん
たち退きもそや一学ぶゆうふ召もあるほど
又杉とそあるらあ人ふ和まそハ一大るの花ぶ
悟られまふあト月りとふ名狩りをおゝこつ
香門も我家く立ゆうぬ寝ふ為ハ思東の
外とあらお茅げぶき利殺りのも迷ひ安き
八代道ありさんび七人の子ハあすとも女ふ肌
身をゆるもほゝさハふ渇是考のるのるぐし

佛も香門ハお茅げ沸き情ふ人中偏くふ
酔るげぶゝ持ゝ後ゝぶて兎角のの
るのげふ付ず兵大息のゝ突て昏夜ゝる
隙もあゝ兵曹おひとげるふ又お茅とても
おあげおひふ伏河ゝ侍丈一学ト足縛れび
雪と雪との遠ひもあり又一学ハ初老の
坂ふいられども香門ハまゞ養の花血ま壮
の男ふいよゝ現ふふ恍惚ぐゝふつく

なるい絵場徇のうち焼くうてへ打〳〵ゐ
あの
思びあゐ身の因果同生今ふまる〳〵行時も
離れぐるあ死風情あり是もちぐめの程へ
ちぐ
ちひゐ人間をの厭ひ世界をも悔しがあく
幸千里のあらはして雖いあとあく一炎中の
ちさ
ちさ汐法とあり危きうへ旭ゐ移る霧の上
ざ
ゐ坐せるぐ〳〵風の前の焼火もまをちぐき
ちあくて却って浮名の立を焼〳〵とあとち

湯ねさ死こそ毒をも厭あぐ〳〵よ〳〵無分
別の不簡ようふ笑いぐらも高上ふあって
今へ笑情拒女のぐ〳〵に吉あど吉合て果つ
笑ひつするあんど云沼は断の行状彰てへ
命ぐうう夜家の織巳因縁あらんとゑ
どもて怪よう〳〵那ぐまあびたれまぐあうと
云を縋りてちひゐ命を投出〳〵てのいぐら
ゆふいう〳〵居住ひの男女も身ふ災ひのを

らんすを忘れて帳をとりて出るもあり
きれぐ一巻もあく〻窓通の五湖法粗事
入りてやものぞとんを付て何のふ徒の人の風体
不遠ひもあらず形節只苦〻き様なれど
足弟ひ子れがあく〻ともふまふ二ヵとなく〻おひ
ろれども意分思業〻今渠ふろうを
付て捨るべ何のよりもん安〻一期の内ふ白
ゆ〻あれども能〻かりべ黒暗の和を光

明一出るもの左理ありまづ男一人の押晴て
世間の風俗ふあひ主君の氏名までも出べ
あく〻のつく〻上ミへの忘れありされば貝を称
ぶりてお若を離別せべ付捨〻程ふ奏く
五湖法いあるまじきれども矣張吾和を明
白ふ形つ〻て一家中とも不今まで疑ひて五
〻も徒らそふ笑せ〻故ふ離別をとれるる
ぐ〻と風俗のさるも又ひ〻き涙ありり

さてもかの女もあくがれ是もあくがず何事波
風なきやうに納る方役思薬もなきトん
我痛て苦くるる様悪様きも程とそあれ
都く我身の仇とある獅子ん中の毒虫
をあのひ知らぬぞ是非もなし係る一言が
心底ふかくとく女ぞうか苦しん香門ふかく
まろう迷ひある時悪人ふ告るる吾仇あん
身ふ勘深まくせ〜よういうあるあちろ

因果ぞ
寝てもたぐ面教の忘る
るあく人の嘆りも世の義理も又いろとの
なもとくも敵ぬんの馬鹿〜〜いろまでそう
思ふ世まのぐうふるきうあ〜も世れべそそ
係る刹那のあひふれ沉ぬるとくのお情
われ仇ニとぞ吾身を何ぞ人ありとも連退く
ものまとしたもあくそん迎もんの係ふ配偶て
今のあのひを懈まべきよすがもは〕トいくれべ

香門ハ幸ヨリ死ンとまでもふのひゝ程の
ゆゝあり世ばまことに男子我ものおもうと
人のうちふいなめくども無と海ぬ新亀ゝく
ある程伝へられゝれど十余年来配偶て
子までをゝる一学ぶをふり捨て立退ん
とまでもおもひ母ゝ仏ゝ吾多ふとうてい
ゆゝくおのひまぐれど代未夫婦とあうてえ
基をも飽きひ外ふをうりゝふとをい

労ゝて初めき男子道その場ふいうて何
程後悔まるとても元の鞘へハかさまふずと
幸を持せてといひられぶ、茅ハ涙ふ同日涯
コハ一概ある伝うる年月ゝ流さるうち
一人の娘ハ儀けたれども初めうらの慈中と
いうてもあうれべるゝゝふんあハ見殺ゝ
なうさ一人の娘をも捨て義を立通んトナハ
よゝくのうとあゝゝうきれのハトあ実の

涙不形迄ゝれば香門も若葉の後茅屋
ぎ方程不却ひ迫しるゆあゝび仏の二ゝ不
雷とゆぎいゝゆも形をゝん合せてとゆあひ
立迫ゆさんゆれば貴尾を考へ寒ゝ不和せ
ゆ人色ゆゆゝび色国ゆも悟られゆゝふゆトいひ
舎ゆて香門ゆを首いゆゝるお茅ゆ妻び
しゆゝ尾紙形ゆもゞゆしとんふ無て付考ゝゝれ
ゞも是ゞとゝふ形ゝゆらゆあく独不一学ゞ

岳ゆ門長五のゝゆあれび萬ゝゆふ仏せず
只手をゆて打ゝゝるゞあゝ肘お茅香門不
むゝひてゆゝゝれゝ日外ゆゆせゝ通ゝ仏の二とゞ
貴尾をゝん合せゝゝ西新ゝせゆさんとんふゆゝふ
砕ゞも是ゞとゝふ紙形ゆもあゝ一学とゞのく
泡り番の留ゆとあゆ人どゆそれゆ考六ッ形
不出らゝ板疲不ゆゝりてゝふゆゆふゆまゝゞせず骨
番の留ゆる表牲文人国の関ゝゝく又物

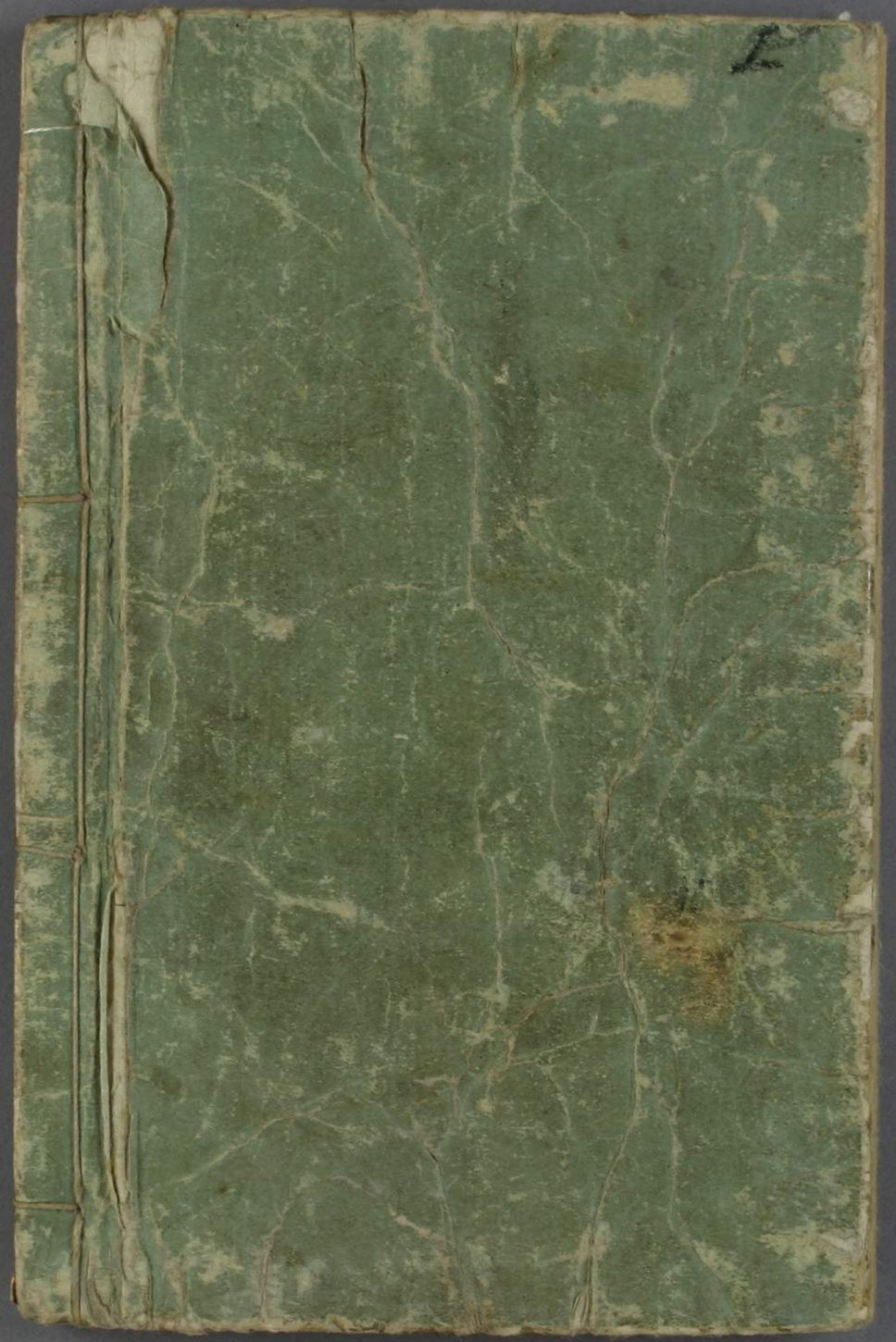
清でふかと付て出んとまれハ娘いふとうが形
鹿ゆのうことを信ふ法まて老ぞもの因
さすぶふ盗まれずけうくの恩愛ハ何年
戯場を拵新ものさまもれば紙形をえく
小用ふ立ふりふ舎教人ゆあれば又ゑうて
ものまとやべき侍その附一ふふ出ものこまてのう
外ふ紙ふ簡も書てあ〜さまもればむすめ
おとうを歌ておん対へ芝居を稽ぐらせやす

ぐ〜夫ゆ外ふ写〜き思業もあらべ教く
ものまといふふ香門もいっさゆその形表こ我
紙ぐべ〜果もそのの芝悟ゆてまず先へ落付
ゆをこ面紙〜ゑぐべ〜ト絵業〜て立別まて
偽ゆ三日ゑて香門一学ぐ宅へふ〜ればゆ茅
ハ娘おとうを侍て夫といと稽ど寄り芝居の
風体ゆ〜ふおとうハその絵ふ〜ふ〜きてアノ
香門さゆゆハ戯場の技業ぐ〜ひのよハ

角田のうのよ〜〜〜みのうちぐま　河華一日
山振素ちされ山ト金毛あくいく　かさ〜〜〜
お茂が咲めぬ〜〜よトおのの人どもさあいね　能あく
是い〜〜いのるふそれを知りめひ〜ぞ　後〜
泡彩のあいぬるのあり山存どのくいい足姫も
あ〜〜いつまでも山晴ひ次寺お振素ナスべ
まうのぐらのの咲き二学とのおぐ〜めもの
あれば山門のそ尾をよく待ひあくとうえべ

かうい晴〜〜く夫い整てもお茂きひ振〜
のまま考〜〜いのの埋き毒〜あれども吾後
芝毒くあひう茂トヤ世ばいうあてもよせト作
られ〜〜るいあ〜〜あるきく山咲毒みあれば
父さ西〜い能毒〜ふいひあ〜てまいうべ〜トちや
のう
毒て来る云後ふ法は西振〜方いうあてる
那合よき後振豆日あて明後日わ　も日戎
元寃て毒の人と豆ぐ〜毒く接振　お後〜ば

明日と弱年なる〜おとうがんの〜〜〜

さかやのくらう一れいらうんめ[illegible]こいおのく
どの娘がねがひ[illegible]墓の[illegible]ふ[illegible]され絵方
あく一ト月を立出コレハく香門どの今日ハあさ
おけあく娘ぶよく[illegible]ぶ[illegible]むちんや　おせ結の限
あかく入ト子をおりよ親の接穂ふ　疱持兵の
きそ係熟く伺ぶ偽お安ひるのトだうあそ
香門ん立出ね

江戸花誌　巻一終